
神様のおつかい

ミニマスコット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のおつかい

【Nコード】

N5372S

【作者名】

ミニマスコット

【あらすじ】

中一の頃から不眠症の23歳、甲斐悠樹。

会社帰りにコンビニに寄ろうと思ってたら気を失って気付いたら目の前にはファンキーなおっさんが！

これからも充実した毎日を送るはずだったのに、このおっさんのせいで・・・！

更新遅いですがよろしくお願いします。

第一話 「hello! おっさん!」

甲斐悠樹 かいゆき 23歳。

会社帰りに突然の心臓麻痺で死亡。

私は中学一年生の頃から不眠症だった。

最初の内こそ親に相談して病院に行ったりしたものの全く治る気配もなく、眠くもならないし体も時々横になれば別に問題なかったのだ、両親や医者には治ったと言っていた。

寝なくてすむというか眠れないので、高校、大学の入試勉強を夜中はずっと勉強していたのでそこそこのいい学校に行くこともでき、ついこの間無事に就職先も決まり、社会人として働き始めたばかりだった。

嫌な事といっても上司が口うるさいくらいで毎日楽しく、充実した毎日を送っていた。

そんなある日、会社帰りに最近飲むようになったビールを買おうとコンビニに寄ろうとしたところ、一瞬苦しくなり意識を失った。

そして今の状況になった。

目の前にはファンキーなおっさん。

金髪のアフロに黒いサングラスをかけている。

とりあえず外国人っぽい顔をしているようなので、英語で「hello?」と話しかけてみる。と、
「hello!」と返される。

やはり私の読みは正しかったか!と地味に喜んでいると

「てかなんで英語?」

と、にこにこしながら日本語で聞いてくる。

ええーっ!日本語話せんのかい!

そういえば・・・

「Who are you?」

「ええー！っ！だからなんで英語！？日本語話せるってば！」
もおーっなんでやねんっ！とツッコミを入れてくるおっさん。

「いやいや、質問に答えるよ」

「俺？神だけど？」

と、言ってきた。

私は瞬時に小さな頃に言われた言葉を思い出した。

『見ちゃだめよ！』

絶対頭おかしい人だコイツ。今すぐ立ち去ろう。

と、周りを見ると何も無い。本当に何も。

ただただ白っぽい色が見えるだけで先も見えない。

私はコンビニに向かっていたはずだ。

「ここはどこ？」

誘拐されたのだろうか？誘拐されたとして真っ白で何も無いって意味わからん！

こめかみを人差し指でぐりぐりしていると

「んーっどこって言われてもなあ。まあキミのいた世界とは違うよね。かといって異世界でもないし、キミたちの言うあの世でもないしいー？」

夢だ。うん。これは夢。はやく目え覚めろ！今立っている床に頭を打ち付ける。

これは夢。おはよう私。早く起きろ！

「おいおいなにしてんの！もう一回死んじゃうよ！？」

ピタツと頭を打ち付けるのをや止める。

「・・・・・・・・待って。今なんて言った？」

床から顔を上げてファンキーおっさんを見る。

「もう一回死んじゃうって言うてんの！さすがに二回も死んだらいくら神だからって俺も生き返らせられなくなるよ？」

もう一回？ってことはもう死んだって事なのか？

「・・・・・・・・。」

「そ。キミは死にましたあー！」

「たあー！じゃないよ！やっぱり夢だ！そくに決まってる！」

うー、あー、とうなっていると

「別に死んだ事、認めたくないなら認めなければいいんじゃない？そしたら俺はキミを生き返らせなくてすむわけだし、面倒事さようならあー！」

自称神はそんなことほざきやがった。

うん。もう変態さんでも別にいい。生き返らせてもらおう。

「変態じゃないし自称でもないんだけどね？」

ん？私口に出して言ってたっけ？ふと疑問に思うと

「神なんて考えてることも全ておみ通しなのさっ！」

はい、そのおっさん。キモいからくねっとなしの。

「ひどっ！もう！生き返らせないぞ！」

「すいませんでした！」

ここは素直に謝るのが一番だ。

「てか私は死んだとしてなんで死んだの？」

やっぱそれくらいは死人として知っておきたいよね。

「え！？なんでっ！？」

え、なにそのあせり方。

「だから死因！もしかしてアンタが私を殺したの？それで生き返らせるとか言ってるわけ！？」

ビクツとするおっさんの反応を見るとそのようだ。

私の充実した毎日はコイツのせいだ！

「いや！そうは言ってもね？人にはそれぞれ一生のうちに起きて行

動出来る時間が決まってて、

その時間が終わるとキミのように心臓麻痺とか事故とかで死ぬんだけど、

キミの場合は夜に寝なったことでほかの人より過ぎてしまったわけだけど、

元々キミの寿命、起きていられる時間はほかの人より短く、不眠症にならなかったとしても

どうせあと3年と8ヶ月と12日しか生きる事が出来なかったわけだ！」

あわあわとおっさん（自称神）が言う。

「アンタが私を不眠症にして寿命を縮めたのか！」

原因はこいつか！人生の中で一番の睨みをする。

「だからそれは悪かったって！だから特別に今度は寿命延ばしてあげるからさあ？怒らないでよ！もうDSで困っちゃうわ！もう！」

うるうると少し涙を浮かべて言う。

でも別に金髪アフロにサングラスのおっさんがそんなことしても可愛くもなんともないし、キモいだけだ。

そしてわたしにおっさんをいじめて楽しむ趣味は無い！

「もういいからはやく生き返らせてよ」

なんかこの神と喋ると疲れるわ・・・

ほい、どこから出したのか水のような液体を差し出してくる。
え、今どっから出したの！？もつとじっくり見ていればよかったと
少し後悔。

「あ。言い忘れてたけど時々面談するから。」

「はあ！？」

「本当ならあとちょっとしか生きられないのに800年も寿命伸ばしてあげるんだからやって欲しいこともあんの！」

ん？今数字がおかしかった気がするけど気のせいだね。うん。気のせいだ。

てゆうーかやって欲しいことってそのために私を生き返らせるのかよ！

「さ、はやく飲んで。それとも生き返りたくないの？」

3年と8ヶ月だったかしらないけど、アンタは私の貴重な人生を奪ったんだぞ！

「生き返りたいよ！」

「じゃあさつさとこれ飲んで。ちゃんと飲み込むんだぞ？」
と先ほどの水のような液体を差し出してくる。
おっさん（自称神）から受け取った液体を見る。

もうこうなったらヤケだ。飲んでやろうじゃねーの！
とある。

瞬間、喉に焼けるような痛みを感じた。

まるでどろどろに溶けたマグマを飲んでいるよう。

神を見ると飲み込む事を促すように首を縦に振っていた。

ごくつと飲み込むと、体全体が熱くなり痛んだ。

手や足をかきむしるが痛みは引かず、暴れる。

「あああああああああああああああああああああああ
あああつつつつつ！」

まぶたが閉じる直前、

「最初の面談は一週間後だ」

とだけ聞こえて私は気を失った。

第二話 私の担当はボケなんです。

目が覚めると私はだれかの家にいた。

そんなに広くはないものの、きちんと整理されている。

私の上には新しくは無いけれど決してボロボロではない毛布がかけられていた。

頭がぼーっとする。

こんなの不眠症になった中一以来だ。

ふと顔をあげると、50代後半くらいのおじさんが手にお皿を持ってこちらへ近づいて来ていた。

「目は覚めたかい？」

日本語とは明らかに違う言葉で、聞いたことも無いはずなのに自然と何を言っているのかわかった。とりあえず こくり、と頷く。

と同時に私の腹部から ぎゅるる・・・と、なんとも間抜けな音がした。

ぷっ、と笑いながらおじさんは

「そうか、まあとりあえず食べなさい。君はとてもお腹が空いているようだね」と言った。

顔が少し火照るのを感じながら、彼が差し出すスープを受け取る。

「ありがとうございます」

日本語ではないのに、まるで最初からその言葉を知っていたかのように勝手に口が動いた事に驚く。

しかし、それを悟られないようにスープを口へ運んだ。

瞬間、コーンスープのような味が口の中に広がる。

そのリアルすぎる感覚にこれは現実が起こっていることだと判断する。

私の頭がおかしくなっていないとしたら、そしてあの神が言っていたことが本当ならば、奴は私をきちんと生き返らせてくれたようだ。しかしもちろんここは私の家ではない。

おっさんは私をどこに生き返らせたのだろうか。

ちらっとおじさんを見ると、それに気付いたように微笑んでくる。

「お口には合ったかな？」

「はい、ありがとうございます」

私は正直神とかは信じていない。

だが、これが現実起こっていることならばできるかぎり自分の家に帰るのに、人間関係をきちんと築き上げていったほうが得策だ。

そしてここで私を休ませてくれているくらいだから彼なら協力してくれる可能性が高い。

ここが外国ならば日本に帰るには人の助けが必要だ。

私は不眠症なのだからこれが夢である確立は低いだろう。

それにもしこれが現実でなかったとしても保険をかけるのは悪くない。

私は生きるためにはなんでもするし、つねに自分が生き残れるような保険や方法を考えておく。これは子供のころからそうだった。正直計算高くて全然可愛くない子供だったと思う。

しかし、だからこそ今まで社会で上手く立ち回れていたと思う。だから私はこの、人の良さそうなおっさんにはできるかぎりいい印象を与えたい。

おじさんはにっこり笑って机にひじをつき、指を組んだ。

「ここはどこだと聞きたいのかい？」

「はい」

顔に出ていたのだろうか。

少し驚きつつ肯定する。そしてその事に気を良くしたのか、彼はますます笑みを深めて言った。

「ここはアルバニア王国のエルライトという山の中腹だ。まあ山と
いってもそれほど高くはないし、比較的近くに町もある。君の名前
は？」

アルバニア王国？言語も初めて聞くし、もしかしてここは外国とか
じゃなくて異世界とか？

ま、それないな。あははははははは・・・

あのクソジジイならやりかねない。

「私は甲斐悠樹と申します。」

「ほお。珍しい名だな。カイユキというのか。私はロドルド・ハル
ムだ。ところでカイユキは何故あんなところにいたんだい？」

待ってくれよ・・・カイユキで名前だと思ってる？苗字が甲斐なん
ですけど。

てゆうか私、あんな所ってどこにいたんだろうか。

「私はどこにいたのでしょうか？」

「私の畑に使う肥料の上にいたんだが」

「うえええええ！？なんでだよ！？」

あのおっさんよりによってなんでそんなところに落としたんだよ！
次に会ったら絶対ぶっ殺してやる！

頬を引きつらせていると、ふと思った。

服は！？

肥料まみれじゃあ・・・

じゃあ何で今、きれいな服を着ているんだああ！

またハルムさんは私の顔を見て、何を言いたいのかわかったようだ。

「服は私の妻が着替えさせたよ。」

すると部屋の奥から女の人が見れた。

「もう大丈夫？ 風邪はひいてないかしら？」

少しふつくらとして、やわらかい雰囲気を出している。
ハルムさんの奥さんだろうか？

「しかしカイユキはなかなか口が悪いようだな。でもやっと本当の
カイユキを見れた気がする」

そう言われて気付く。

猫かぶるの忘れてたあああい！！！！

「う・・・うふふふ？」

「私は堅苦しいのがあまり好きではなくてね。先ほどくらい砕けた
口調のほうが話しやすいのだが」

「そうよ？私も素のカイユキちゃんがみたいわあ」

「いやいや、私の素はさすがにやばいって。

自称神のおっさんに会った時はパニクリすぎて素が出ちゃったけど、あれは今考えてみてら調子乗りすぎたと思うし、てへっ じゃあ済まされないレベルだと自分で思うし。

てゆーか急に奥さん混じってきたな。

などと考えていると、

「で、なんで肥料にまみれていたんだい？」

「いやこっちが聞きたいわ！」

「あらまあカイユキちゃんって面白いわ。返しがお上手ね」

「やっちまったあーい！」

肥料まみれにされたってゆーのは、なかなかショックが大きいからつい素がでちゃうわっ

私ったらホントおっちょこちょいなんだからあもう！ てへっ

条件反射でツツコンでしまっ自分を責める。（？

てか本当にちよくちよく奥さん混ざってくるな。

「もしかして肥料のニオイが好きだったりするのかい？」

「んなわけあるかあー！ってゆーかさっきなんでそこにいたかわからないって言ったよね！」

「うふふふっ久しぶりにハルムのボケが聞けて楽しいわあ。それにカイユキちゃんのツツコミもなかなかキレがあっといういわねえ」

いやだから奥さん何がしたいの？

さっきからのポジションに立ってるのかいまいちわかんないんだけど。

この世界にもボケとツッコミっていう言葉あったんだ。

てゆーかやつぱり夢オチですかこれ。

あ、とりあえず頭打ち付けてみようかな。

もう自分でもなにがなんだかわからない。

おっさんの神との絡みのときにそうだったように私の担当はボケなのだ。

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

「ふ」二回に対して一回のスピードで床に頭を打ち付ける。

リアリスト

現実逃避は現実主義者の私にとって、蔑むもの以外の何でもなかったが、今なら現実逃避をする人の気持ちがわかる気がした。

第三話 ハルム家でのポジションがツツコミに決まりました。

「だ、大丈夫かい？」

ハルムさんが若干引きながら話しかけてくる。

私はやっと頭を打ち付けるのをやめ、二人に向き直った。

「申し訳ありませんでした。もう大丈夫です」

現実逃避はもう終わりだ。

そろそろ本来の私を取り戻さなくては。もう大丈夫だ。

そう、自分に言い聞かせる。

すると、ハルムさんが先ほどの質問をしてきた。

「すまなかつたね。少し遊びが過ぎたようだ。では話を戻そうではないか。カイユキ、君は何故あんな所にいたのか、自分でもわからないようだが、心当たりも全くないのかい？」

ここでそのまま本当のことを話せば、確実に頭のおかしい人に認定されてしまう。

適当な嘘を吐くべきなのだろう。

しかし、彼らに先ほどツツコミにさせられてしまった私としては、

とりあえずボケのポジションを取り返したかった。

「私、多分この世界の人間じゃないんだと思います。この国の名前も聞いたこと無いですし、なんか私、神様に殺されちゃったみたいで。」

こんなこと言われたら、「んなわけあるかあ!」と突っ込まずにはいられないだろう。

むふふ・・・、と二人に気付かれないように小さく笑う。が、

「あらまあ・・・そんなひどい目にあつたの?可哀想に。じゃあこれから住むところも無いのでしょうか?ずっとここにいなさいな」

「そうだね、それがいい。異世界で困ることも多いだろうが、私たちになんでも相談してくれ」

待つて下さいよ。なんでそんなにとんとん話がすすんでるわけ? いつの間にか私、住む場所GETしちゃってる感じですか? 神に殺されたとか異世界から来たとか、そんな簡単に受け入れないで下さいよ。私のポジションはボケなんですってば。まあ住む場所が確保出来たのは嬉しいけども?

「あのっ!」

もう一度 ツツコミしないんですか!? と言おうとした時、コンコンとドアを叩く音がした。

ハルムさんは一瞬そちらの方を向いてドアを見つめた後、顔をもどした。

出なくていいのだろうか?

「家族になつたのなら部屋が無くてはな。私はこれから仕事のよ
うだからミリア、たしか余ってる部屋があつたね？カイユキに案内
してやつてくれないか？」

奥さんが「はい」と答える。

ミリアという名前なのか、覚えておこう。

じゃなくて！

いつの間にか家族になつてた！？

しかも部屋まで貸してもらえる事になっている。

なんか最近良いことが次々に起こる。

これから悪いことがいつきに起こってしまうのではないかと怖く
なる。が、気付く。

最初に神のおっさんに殺されたことで悪い運を使い切ったから、
今はその反動でこんな風に私に都合が良いように事が運ぶのだろう。

私はボケのポジションを犠牲に、住む場所を手に入れる事にした。

先程より強く、ドアをノックする音を聞きながら私は

「ありがとうございます」といった。

親切な人たちに巡り会えてよかったと心から思う。まあその前に変態のおっさんに会っていなければ本当に最高だったのだがまあしょうがない。ところでさっきからだんだん強くなっていくノック音は無視していいのだろうか？

やはり、というべきかドアを乱暴に開けて青年が入ってきた。

「ハルムさん！さっきからノックしてるのに、なんで開けてくれないんすか！？絶対きこえてましたよね？無視ですか？無視したんですね！？」

早口に話す青年はハルムさんに怒るが、当のハルムさんは漂々として首をすぼめる。そして私の方を向いて「やはり仕事のようだ」といい、青年のほうへ向かう。チラッと彼はこちらを見るが、すぐにハルムさんに文句を言い始める。ハルムさんはまあまあ、と言って彼をどこか別の部屋へ案内した。

「えつと？」

今の青年は誰だろうと首をかしげているとミリアさんが、

「エヴィンくんよお。ハルムの助手をやってるの。」

と教えてくれた。そこでふと、思う。

「ハルムさんはどんなお仕事をされてるんですか？」

なんだかんだ、これからお世話になるそうだし、せめて仕事とかの手伝いくらいはしないと人間としてダメだろう。

「一応医者をやってるわ」

「あの、私に手伝えることと違ってありますか？」

薬を作るならなんか草とかを採ってくるとかなら私にも手伝えそうだと思いそう言うがミリアさんは、さも驚いたというように私を見つめた後、にっこりと微笑んだ。手伝うと言った事がそんなに意外だったのだろうか。

「そうねえ。まあとりあえずはハルムより私を手伝って欲しいわあ。ダメかしら？」

「あ、はい。どんなことをお手伝いすればいいんでしょうか？」

ミリアさんというか奥さんのお手伝いといったらやっぱり・・・

「お洗濯とかお掃除とか。最優先なのはやっぱりカイユキちゃんのお部屋が最近お掃除してなかったからそこをお掃除するって事よね。とりあえず出来るだけ今日片付けて、きちんと寝られる環境を作らないと。」

私は生きている時、いや、今も生き返ったから生きてるんだけど、おっさんに殺される前に一人暮らしをしていたのだが正直家事全般がとても苦手で、週に三回は友達に片付けに来てもらっていた。料

理は結構自信があるのだがそれ以外は本当にダメ。だから掃除とかはちよつと・・・

「あの・・・？」

「さ、じゃあまずはカイユキちゃんの部屋に案内しましょうか」

私が「それはちよつと・・・」と言う前にミリアさんが話を遮り歩き出してしまう。

まあ自分の部屋だし、むしろ本当は私一人で片付けないといけないのを、ミリアさんに手伝ってもらいだから感謝しなきゃいけないと思う。

アリガトウゴザイマス。

そして私はもう、ここに住まわせてもらうからにはポジションがツツコミになっても文句は言いません。

「さ、ここよ」

案内された部屋は思っていたより全然綺麗だった。

一人暮らししてた私の部屋よりよっぽど綺麗でた少しホコリが隅にたまっているくらいで、家具もきちんと揃っていた。ベッドに腰を下ろすとギシッ　と音がした。

と、一気に疲れが体を襲ってきた。

「やっぱり片付けは明日にしましょうかね。今日はちょっと喋り過ぎちゃったからカイユキちゃん疲れたでしょう？今日はゆっくり休んでちょうだいな。」

「すいません・・・」

ミリアさんには申し訳ないがよかった。体がだるいので今は横になりたい気分だ。

「そういう時は『ありがとう』の方がうれしいわ。じゃあなにかあったら言ってね」

「ありがとう」

そうして私は部屋に一人になると、今までの事を振り返っていた。

眠らないことによって早めに死ぬことになったものの、おっさんが言うには元々私の寿命は短かったらしいし、ハルムさんやミリアさんは親切で、ここでも結構ちゃんと生活できそうだしなんだかなだ言ってよかったのかもしれないと思う。

だから、おっさんがミスって私を殺したことはやっぱり頭にくるが、まあ許してやらない事もないかな、なんて思ったり。もちろん本人に言うつもりは無いが。

ハルムさんたちに「異世界から来た」といった時、確かにボケのポジションをとり戻したかったのだけど、二人が本気で信じてくれたことがすごく嬉しかった。

いや、信じているわけじゃなくて悪乗りして「んなわけあるかあ！」と言わなかったただけかもしれないけれど、なんとなく、自分の存在が受け入れられた気がしてほっとした。

だから、友達や家族と離れ離れになり、一生会えなくても、おっさんを許してあげる気になったのだと思う。

両親やお兄ちゃんはどうしているだろう。

やはり私が死んだことを悲しんでいるだろうか？

共働きで忙しかった両親に代わって面倒を見てくれたお兄ちゃん
はかなりのシスコンだったから、特にぼろぼろになっているかもしれない。

いや、ボロボロになっていて欲しいのかもしれない。

それだけ私は愛されていたということだから。

あ。彼氏はどうしてるかな？

最近倦怠期だったからまあそんなには悲しんでないかもしれない。

どこか客観的に見ている私がいる。

みんなには悲しんで欲しいと思っている私がいながら、自分自身はあまり悲しんでいない。

自分で不思議だった。

悲しむというより、むしろわくわくするのはなぜだろう。

今日の疲れを取るために、私はベッドに横になって目を閉じた。

第四話 私の血液型はO型ですけどなにか？

目を開けるとすでに外は明るくなっていて、鳥の鳴き声が聞こえていた。

目をつぶってからそれほど時間が経ったようには感じないのに何故だろう。頭も、今までになかったほどさえている。

ベッドから起き上がって部屋を出る。

食事をする、リビングのような部屋は昨日私の部屋に案内してもらう前に連れて行ってもらっていたので、とりあえずそこへ行ってみる。

すると、テーブルについてハルムさんとミリアさんが食事をしていた。

「おはようございます」というと、ふたりが「おはよう」と返してくれる。

「よく眠ったら疲れが取れたかしら？それにしてもカイユキちゃんの寝顔可愛かったわぁ」

ふふつとミリアさんが笑い、ハルムさんがお茶をすすする。

寝顔？不眠症の私が眠った？驚いて目を見開く。

それを見たミリアさんが、私が怒っていると勘違いしたのか少し

焦った様子で

「朝食がもうすぐ出来るから呼びに行こうと思って、勝手にカイユキちゃんの部屋に入っちゃったの。ごめんなさいね。」

といった。

「ああ、気にしないで下さい。ただ、涎を垂らしてなかったか心配です。」

あはは、と笑って言う。

そつえば寝るってこんな感じだった気がした。
気がついたら時間が過ぎてて、外が明るくなっている。

うわあー！中1ぶりだからえーと？8年ぶりじゃなか！

一人で感動していると、ハルムさんが

「朝食が冷めてしまうよ？食べてしまいなさい」

ミリアさんが料理を差し出した。

「ありがとうございます」といって椅子に座りテーブルを見ると、パンらしきものとベーコンのようなものと、黄身の部分が青色のうずらの卵くらいの大ささの目玉焼き3つがのっていた。

「さ、どうぞ。」

青色の目玉焼きを食い入るように見つめるわたしにっこり笑って見リアさんはそう言う。

「食べたらず掃除をしましょうね？」

こわい。こわすぎる。全然美味しそうに見えない。

それに、食べた後は掃除だと思うとさらに食べたくなくなる。

目をつぶって口に入れてみると、パサパサした塩っぱい味がした。

不味くはないが美味しくもない。

なんかちょっとがっかりだ。

そんなふうに朝食を食べ終わるとハルムさんは昨日青年と入った部屋へ行き、私とミリアさんは掃除道具を持ってマイスイートルームへ行き、私の大嫌いな掃除が始まった。

「うわぁーお」

A：一瞬にしてほら！どうです？見てくださいよ。

B：あんなに頑固な汚れが！これだと掃除が楽しくてしょうがないですね！

・・・でもお高いんでしょう？

A：ところが今ならなんと！19800円！19800円からのご提供です！

B：うそおー！夢みたいだわあ！

A：しかも！今ならセットでもう一つおまけに付けちゃいます！もちろんお値段は変わりません！

B：今すぐ電話しないと！

A：お問い合わせは。○○○○。○○○○。○○○○。まで！お早めに！

頭の中でおにーさんとおねーさんが喋っている姿が浮かぶ。

「ふう。きれいになってきたわねえ」

「そうですねえ」

そう言いながら床を拭く私とミリアさんが手にしているのは葉っぱ。

ただの葉っぱと馬鹿にしちゃいけない。

見た目こそ普通にそこら辺に生えている雑草と同じだが、床を拭くとあらびつくり。汚れが葉っぱに吸収されていくのだ。

しかもその汚れはなぜか手に付かない。さつと一拭きであらきれい！掃除嫌いの私もお掃除が楽しくなっちゃうわ！

はあー。めんどくせえ。

なにしろ飽きやすい性格なんですつて。

私元々掃除嫌いだし？いくら新しい道具貰ってもねえ？

やる気が無いモードに突入し始める。

「まあこれくらいでいいかしらねえ」

ガッツポーズをする私を見て笑うミリアさん。

「じゃあ次は隣の部屋ね？」

笑顔が引きつる私を見て、さらにミリアさんが笑った。

その後、もう一部屋掃除をした私はくたくたになって椅子に座っていた。

そこにミリアさんがやって来る。

「お疲れ様」

そう言つて暖かいお茶を渡してくれた。

「ありがとうございます」と言つて受け取りお茶をすすむ。
いつの間にか外は日が落ちかけていた。

生きていくにはなんでもするつもりだけど、その方法が掃除なのはツライ。

だからといってやめる訳にはいかない。

ぼんやりと太陽が存在するって事はもしかしたらここは異世界というより同じ宇宙の地球ではない星なのかもしれないな、と考えながらその眩しさに目を細めた。

「私にもお茶をもらえるかな？」

声が聞こえた方を見るとハルムさんがこちらに歩いてきていた。

ミリアさんからお茶を受け取りすすむ姿をぼんやりと眺めていると不意に目が合った。

「今日はミリアの手伝いをしていたそうだね。大変だったかい？」

「いえ、それほど大変では無かったです」

「そうか」

カップの中身を見つめる。

見た目も味も紅茶そっくりだけどコーヒーの香りがするそれを揺らしている

「明日は私の仕事を手伝ってはくれないかい？」

という声が聞こえた。

ハルムさんは医者だと聞いて手伝えることはないか、とたずねた時に話を軽く流されていたので私には手伝えない、もしくは手伝わせないのではと思っていた。

まあ医者は命を扱う職業だし、素人なんかには手伝えないのだからと自己完結していたのだが……。

「いいんですか？ 私なんかが手伝っても？」

「まあ試しにやってみたらどうかね？」

ありがとうございます！ 私は掃除以外ならなんでもいいです！ という言葉を飲み込んで

「はい、よろしくお願いします！」

と言った。出来る限り声が弾まないように気をつけながら。

しかし嬉しいものは嬉しい。若干最後にテンションが上がってしまった。

ミリアさんに

「明日はハルムさんの仕事をお手伝いしてもいいでしょうか？」

と聞くと「いいわよお」と許可してくれた。

「ありがとうございます」

お礼を言うためにミリアさんの方を見ると、にっこりと微笑んできた。

私はその前に顔が曇っていたのを一瞬見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5372s/>

神様のおつかい

2011年5月21日00時38分発行